

全学共通

国語

(60分 100点)

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
 - ② 解答にはH BまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはH BまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
 - ③ マークシートの解答用紙には、氏名、受験番号、科目を記入する欄と受験番号、解答科目をマークする欄があります。
 - ④ 解答方法は、マーク式（解答番号を選択する方式）です。マークシートの解答用紙にマークしなさい。
- 例えば、**10**と表示のある問いに対して③と解答する場合は、下の（例）のように**解答番号10の解答欄の③**にマークしなさい。
- ⑤ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高くあげて監督者に知らせなさい。

（例）

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

※ 問題に使用した文章の表記は、一部改めた場合がある。

国

語

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

社会学の巨人たちは、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけて登場した。彼らは偉大だったけれども、いくつかの問題もかかえていた。

いちばんの問題は、彼らがせっかく編み出した社会学のロジックが、誰でも使えるようなかたちに書けていなかったということ。数式で表現できていれば、いちばんいい。数学までいかないまでも、Xロジックとして容易に修得できるとよい。しかし実際には、彼らの残したテキストと悪戦苦闘して、どうにか体得するしかないものだったのである。そうすると、弟子たちの出来が師匠よりも悪いことも手伝って、あれこれ奇妙な解釈が **a** 横行するようになり、もともとのロジックがますますはつきりしなくなってきた。

そこで、この社会学のロジックを、もうちょっと一般的なかたちで表現したり、再構成したりできないかということが、ひとつの問題になってきたわけである。

ところが、一九世紀の当時は、自然科学や数学などの分野がまだまだ未発達だったために、社会学だけが他に先駆けてそれを成し遂げるのは無理だった。それが可能になるのは、一九三〇年代以降になってからである。

A 二〇世紀になってから、いくつかの分野で、社会科学は急速な進歩をとげた。その最たるものは、経済学であろう。経済学は、一九三〇～五〇年代の間に、過去の理論の数学化をほぼ完成してしまう。それまで古典的に積み重ねられていた、経済や市場に関するさまざまな分析を、数学的に表現し研究する方法を我がものとしたのである。

ここでのキーワードは、「システム」だった。システムは、経済学にとどまらない、非常に幅広い考え方で、二〇世紀の学問の指導理念とも言える。システムをキーワードに、理論構築を進めようという動きが、二〇世紀の社会学をリードする潮流となった。

システムを定義すると、「多くの要素からなる全体」ということになる。**B** これは、原子論の発想をもとにしているが、それを一歩進めたものである。

まず、システム論の考え方によれば、全体というものがある。全体は、必ず要素に分解できる。全体を要素に分解していく手続きが可能である。そして、分解が終わると、要素を取り出せる。いっぽう逆に、それらの要素を組み合わせるならば、もとの全体が過不足なく再現できる。こういう、分析と総合のプロセスが可能である。

このように、分析と総合を通して、全体を要素のつながりとして把握すること。これがシステム論の考え方である。

いくつか例をあげれば、太陽系のような力学的なメカニズムも、ひとつのシステムである。人体のような有機体も、ひとつのシステムである。また、市場（マーケット）のような、人間の形成した社会装置も、ひとつのシステムである。こうしたシステムは、原子のようにみな同じ要素でもって形成されているわけではない。要素は互いに違ってよい。そして、要素と要素がどうつながっているかが、はっきり特定できる。この二点が、その昔の原子論より、一步踏み込んだ主張になっている。

世の中のたいていのものは、**Y**から、システム論で取り扱うことができる。対象を分析し、総合する手段（メソッド）さえあれば、ものごとをシステムとして捉えるこの方法論は、非常な威力を發揮する。

システム論の特徴は、どこにあるのだろうか。

これをたとえば、単一要因説と比較してみよう。

単一要因説というのは、ある事柄を説明するのに、何か特定の原因をひとつだけ考える立場。太陽黒点説みたいに、どんな現象だろうと、強引にひとつの原因から説明しようとする立場である。原因↓結果という因果論の**b** 体裁をとる点はいいのだが、あまりに単純なモデルであるため、結論そのものは科学的な批判に耐えない場合が多い。

マルクス主義の主張は、かなり複雑であるが、最終的には階級闘争からすべてを説明するというロジックは、単一要因説の変種と考えられる。

これに対して、システム論は、特定の要因を説明要因と考えない。すべての要因が互いに連関している、と考える。この複雑な連関をそのままモデル化して、すべての要因の相互連関の結果、われわれの観察するような現象が現れたと考える。もしこれが成功するならば、いちばん現実にフィットした、実証的な議論ができ上がることは間違いない。

だから、どんな学問も、システム論を理想にしている。ただ残念ながら、「すべての要因の相互連関」を分析するうまい工夫がなかなか見つからないので、システム論になれないのが実情なのだ。

では経済学では、なぜひと足先にシステム論が成功したか？

経済学の扱う市場は、非常にうまい構造をそなえている。まず「価格」という実数値の変数（鍵変数）があり、経済主体の行動も市場の状態も、数学的に表現できること。つぎに市場が、「凸構造」という数学的構造をそなえていること。この構造のおかげで、価格メカニズムが自動的に均衡に収束していく。つまり、一人ひとりが自分の経済的利益だけを追求しても、市場全体としてはそれで均衡し、最適の状態が実現するという定理が証明できる。こうした利点のおかげで経済学は、あらゆる要因の相互連関を考慮に入れたシス

テム論のロジックで、市場の成功を論証することができた。

この経済学の成功から、社会学もそのほかの社会科学も、大きなインパクトを受けた。そして、システムの考え方を中心に社会科学を再構成しようという動きが生まれたのである。

ここでは、その動きを社会学で代表する人物として、タルコット・パーソンズというアメリカの社会学者に注目すべきだろう。パーソンズが影響を受けたのは、同時代の経済学者ではなく、彼よりちょっと前の世代の経済学者V・パレートである。パレートの時代の経済学は、モデルが素朴で数学化が充分ではなかったが、システム論のロジックを学ぶのにはさしつかえなかった。

パーソンズは、経済学以外にも、同時代のさまざまな学問——マリノフスキーの人類学や、心理学の小集団研究、社会学の^c先達であるデュルケムやウェーバー——からも、多くのヒントを受けとっている。こうしたいろいろなアイデアを「総合」して、パーソンズは彼独自の社会システム論を練り上げていった。

彼のアイデアの要点は、システムだけでは社会を説明できないと考え、そのほかに「機能」という要因を付け加えたことである。機能（英語ではfunction）と言われても、何だかよくわからないかもしれないが、「目的」みたいなものだと考えるとよいと思う。

社会現象は、機能によって分析できる。社会をこしらえているシステムには、必ずなんらかの目的みたいなものがそなわっている。——こう、パーソンズは主張する。

彼は何でもシステムだと考える。たとえば、個々の人間。個々人の目的は、生き延びること、幸せになることである。つぎに、社会集団。集団にも集団の目的がある。株式会社なら、利潤を上げて成長すること。家族なら、子供を産み育てて安全と幸福を保証すること。つぎに、全体社会。全体社会にも同様に、社会の維持・存続・発展という目的がそなわっている、とする。このように、機能を鍵変数として社会システムを分析できるとする点が、彼のシステム論の最大の特徴だった。

彼は以上のアイデアを、構造・機能分析 (Structural - Functional Analysis) というひとつの理論にまとめ上げた。この議論は、システム論を社会学に導入する当時もっとも進んだ試みだったので、アメリカはもちろんのこと、日本を含む世界中で大きな影響力を持ち、現代社会学を代表する論潮として、各国の戦後社会学をリードした。

システムと、機能。このふたつの組合せ^{くみあわ}によって現象を記述したり、説明したりする考え方は、サイバネティクスとよく似ている。サイバネティクスは、制御理論といい、対象をシステムとして捉えたいうで、そこに目標関数を設定するものである。たとえば冷蔵庫なら冷蔵庫は、さまざまな部品からなるシステムだが、そこに目標関数として、摂氏5度などという設定温度がある。扉を開けて温度

が上がったり、逆に冷えすぎたりすると、機械が自動的に庫中の温度を摂氏5度に調節する。この仕組しくみ(サイバネティック・プロセス)が、冷蔵庫だ。サイバネティクスは、万事をこのように考えていく。

摂氏5度になるように設計された因果連関が冷蔵庫の「システム」、設定温度の摂氏5度になることが冷蔵庫の「機能」である。構造・機能分析でもって、冷蔵庫を分析すると、そう言える。

パーソンズは人間社会も、冷蔵庫と同じであると考えた。組織や集団にも、「機能」という名の目標がそなわっており、それが実現できるようにいろいろな要因が組み合わさっている——ひと口で述べるなら、**C** これがパーソンズのアイデアである。

(橋爪大三郎「社会学概論」、ちくま新書『社会学講義』による)

問1 波線部 a～c の本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **1** ～ **3**。

「**a** 横行する」

1

- ① いつの間にか目立つ
- ② 勝手気ままに広がる
- ③ 検証されずまかり通る
- ④ 自由な方向に進む
- ⑤ むやみに数を増やす

「**b** 体裁をとる」

2

- ① 関係を表す
- ② 外見を取り繕う
- ③ 形式を整える
- ④ 結論に向かう
- ⑤ 手順を踏む

「**c** 先達」

3

- ① 最先端の研究に携わる人
- ② 自分と切磋琢磨せつさたくまする人
- ③ 優れた研究を行う人
- ④ すでに業績を上げた人
- ⑤ 初めて道を切り開いた人

問2 **X** に入る言葉として最も適当なものを、次の中から選びなさい。解答番号は **4**。

- ① いずれにしても
- ② かりにも
- ③ 少なくとも
- ④ せめても
- ⑤ ともかくも

問3

Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の中から選びなさい。解答番号は5。

- ① 同じ要素によって形成されている
- ② 原子論の発想をもとにしている
- ③ 特定の原因をもとに説明できる
- ④ 人間の形成した装置である
- ⑤ 要素から成る全体とみなせる

問4

A

「二〇世紀になってから、いくつかの分野で、社会科学は急速な進歩をとげた。その最たるものは、経済学であろう」とあるが、「社会科学」の中でも「経済学」が「急速な進歩をとげた」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は6。

- ① 経済学は、さまざまな要素が数値に還元でき、さらに数学的に分析しやすい構造になっていて、要素相互の関わりをシステムとして捉えることが、他の分野に比べて容易であったから。
- ② 経済学は、システムとして社会を捉える際に、あらゆる要素を数値に置き換え、社会における特定の原因を見出していくという目的に対して、プロセスを単純化することができるから。
- ③ 経済学は、社会システムに対して、最も分析に適している数学的な観点を多く含む分野だったので、他の分野も試みた、数値によってシステムを解明する試みにいち早く成功したから。
- ④ 経済学は、全ての要因が互いに連関しているというシステムを、価格という説得力のある身近な実数値を用いることで、一番現実にフィットするようなモデルを示すことができたから。
- ⑤ 経済学は、他の分野に先駆けて、全体と要素の関係から成立する社会の構造を初めて見だし、さらに、数学的構造の中で社会の仕組みを数値に還元して表すことに成功したから。

問5

「Bこれは、原子論の発想をもとにしているが、それを一歩進めたものである」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① 原子という均質な要素によって世界は形成されているという原子論から、全体は必ず要素によって形成されるとするシステム論が生じたが、そこでは全体を要素に分解し、それぞれを分析して、さらにそれを組み合わせることで、全体を再現すること、全体の把握をより深めるといふ点で、原子論よりも先進的な考えになっているといふこと。
- ② 原子という均質な要素によって世界は形成されているという原子論から、全体を把握するために分解して要素を取り出して分析し、それを総合するといふプロセスが編み出されたが、そこではあらゆる事物がシステムとして捉えられ、それを形成する要素こそが重視される点で、原子論より進んだ考えになっているといふこと。
- ③ 原子という均質な要素によって世界は形成されているという原子論から、全体を要素に分解して、再び要素を組み合わせることとで全体が再現、把握できるというシステム論が発展したが、そこでは均質ではない互いに異なる要素の関係性にこそ着目しているといふ点で、原子論よりも深まった考えになっているといふこと。
- ④ 原子という均質な要素によって世界は形成されているという原子論から、それら要素の分析の末に全体を再現することで全体が把握できるといふシステム論が展開したが、そこでは何よりも要素間の関係性を中心に据えるといふ点で、関係性について一切考えなかった原子論よりも正しい考えになっているといふこと。
- ⑤ 原子という均質な要素によって世界は形成されているという原子論から、分析と総合のプロセスによって全体を把握しようとするシステム論が生まれたが、そこでは全体を構成する要素が均質なものではなく、互いに違っていてもよいといふ点で、原子論よりも寛容で今後の発展を期待できる考えになっているといふこと。

問6 「Cこれがパーソナルズのアイデアである」とあるが、これを具体的に説明したものと最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は8。

- ① 個々の人間は、社会における様々な集団を構成する要素であるが、さらにその集団も全体社会を構成する要素になることを踏まえて、社会を分析する際に全体だけを見るのではなくそれらの要素も含めて考えようとする。
- ② サイバネティクスになぞらえて、全体社会や集団、個人など様々な社会のシステムを分析する際に、機械的な部品のように社会を構成する要素を捉え、設定温度のような数値的な目標を設定して考えようとする。
- ③ システムの分析には目的の設定が鍵となるが、全体社会というシステムを分析するために、最も細かい要素である個人を中心にすえて、個人が生き延びること、幸せになることを目的に設定して考えようとする。
- ④ 社会システムについて分析する際に、全体を構成する要素に分解して、それらの相互連関のあり方を重視するだけでなく、何を目的として異なる要素が互いに関わり合うのかということも含めて考えようとする。
- ⑤ 全体社会は、個人や社会集団、家族など様々な要素が相互に関わり合うシステムであるが、そのシステムを分析するためにそれらの関わり方だけでなく、社会の維持や存続などの機能を手掛かりとして考えようとする。

問7 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は9。

- ① 自然科学や社会科学に先駆けて、経済学が学問の対象である市場をロジックとして表現することができた。
- ② 単一要因説から導かれる社会の分析は全て短絡的であるため、科学的に認められることは難しかった。
- ③ パーソナルズの練り上げた社会学の方法は、原子論やシステム論のみならず、社会学以外の学問も参考になっている。
- ④ システム論だけでは社会をロジックで表せないで、パーソナルズは目的という特定の要因を付け加えて分析した。
- ⑤ 制御理論の目標関数と経済学の数学的な表現には親和性があるので、ともにシステムを分析するのに適している。

□ 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え な さ い 。

我々の生活世界に対して科学の立場はもともと狭く限定されたものであり、前世や来世といった事柄について判断する権能をもってはいない。前世としての世界、来世としての世界が存在するか否かは、そもそも科学の問題とはなり得ない。□ X、世界観というのはそのような限定を踏み超える。科学が学でなく、世界観に変わるところでは、現世たるこの現象世界のみが実在的であり過去世・未来世は非実在であるという確信となる。自然科学を啓蒙するということは、人々の世界観をそのようなものに変容することであった。そのような世界観をもつに至った人々の存在理解の視界は、基本的に現世を超えることはない。人々の生存の営みはもっぱら実証的な経験世界において展開されるのであり、人々は生存の意味と充実を、生存を内にも外にも超えない生存そのものにおいて求める。

それに対して、仏教では、人間存在を考察する視界を現実世界だけでなく過去世・未来世にまで拡大し、生存の本質を無限の相において思惟しようとする。そこで見えてくるのが、永遠に生死の輪廻を繰り返し、輪廻のそれぞれの生存の出来事は業・因果の摂理によって鎖の輪のように結び合っているというすべての生きとし生けるものの相である。このように理解された因果は死によってすら逃れることのできない牢獄となり、だからこそそこからの脱出が熱望されたのである。

ただし、現代において輪廻転生の観念が人々の心から無くなってしまったというのは誤りである。□ Y それは思いもかけないほど根強く、人々の心の中に生き続けている。幼くして亡くなった我が子の生まれ変わりと信じて知人の子供を可愛がる、自分は過去の歴史上の人物の生まれ変わりだと信ずる、来世においてもまた夫婦になろうと誓い合うことで夫婦が互いの愛情を確認する、等々は、我々の日常よく見聞するところである。一般的に言って、輪廻の観念は我々の日常生活の何かの折りに、脈絡のない仕方ではぼつと姿を現わす。姿を現わしたことによって、自分がそのような観念をもっていたことに初めて気づく。つまり、輪廻ということは現代人の自覚的な世界理解の中に明確で正当な位置付けをもって組み込まれているわけではなく、そのような自覚的な世界理解がそれ自身の内から切り捨てようとしても決して切り捨てきれないものとしてそのような世界理解の背後に a うつつそりと立っているようなそういう観念なのであろう。我々の内に生き続けているのは輪廻転生の思想ではなく、輪廻転生の観念である。この観念は「物語」を紡ぎだす性格のものである。この想念の中にあるのは、死すべき人間の永生への願いであり、あるいはかけがえのない人を喪った哀惜の想いである。

そしてまた因果応報という観念も A 同様の仕方 で、我々の生活の中に生きている。人を騙し人を陥れて富を貯えるような人間や自

は徹底して人間の意志的実践の事柄になる。応報という事柄はもっぱらこの意志的な価値実現の課題に属する。つまり、我々はいったい如何なる価値を意志的行為によって実現すべきであるかということを吟味するとき、因果応報はもはや人間の自然的感情に由来する想念ではなくなり、我々が心の底で期待しその実現を我々自身の手で試みるに至った一つの社会的原理として姿を現わしてくる。この原理は、「善悪の行為にはその報いがあるべきである」という^(注)当為命題で表現できるであろう。現代社会では、行為に応じた報いという意味での因果応報原理は、社会的規範として生きている。

この当為命題はその実現が現代社会で具体的に志向されるものであるから、徹底的に世俗的に理解される。そうすると、善悪の行為への「報い」の与え手は社会全体としか考えられない。したがって、善悪も社会に対する善悪、社会にとっての善悪に限定されるであろう。たとえば、この当為命題のうち、社会にとつては「犯罪は罰せられるべきである」という当為が直接に重要になるが、犯罪は社会の秩序を乱し、社会の維持発展を阻害する行為であつて、いわゆる内面道徳的悪や宗教的悪は除外される。そういう犯罪に対し、強権をもった国家により刑罰という「報い」が与えられる。これらの当為命題はどこまでも、この現実世界における社会正義の実現に向けられている。

(気多雅子「罪と報い」、岩波講座『日本文学と仏教』第2巻による)

(注) 1 アンビヴァレント——一つの対象に対して、相反する感情を同時に抱くさま。

2 当為——そうあるべきこととして要求されること。

問 1

X **Y** に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **10** **11**。

X ① そして ② たとえば ③ あるいは ④ だが ⑤ したがって

Y ① むしろ ② おそらく ③ もはや ④ ようやく ⑤ やはり

問2 波線部 a ～ b の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選びなさい。解答番号は **12** ～ **13**。

「^aうっそりと」 **12** ① 生い茂って ② ぼんやりと ③ 気味悪く ④ 際立って ⑤ ひそかに

「^bないまぜになっている」 **13** ① 代わる代わる打ち消し合って並存している

- ② いくつかのものが合わさり一つになっている
③ それぞれが独立し互いを牽制けんせいしている
④ 二つながらに絡み合っている
⑤ 激しくぶつかり対立している

問3 「^A同様の仕方」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **14**。

- ① 《お伽話》のような想念も含む漠然とした願望というかたちをとるといふあり方のこと。
② 自覚的な世界理解と対立しながらも、それと切り離し得ない永生を願うといふあり方のこと。
③ 我々の心の中に深く沈潜し、日常生活から隔絶された非日常をもつぱらにするあり方のこと。
④ 人々の心の奥底に根強く存在するものの、普段は明確に自覚されないといふあり方のこと。
⑤ 科学的世界観に影響されず、信仰に厚い現代人の心に受け継がれているといふあり方のこと。

問4

文脈上、

に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は

15。

- ① 科学的世界観は輪廻転生を一つの《お伽話》にした
- ② 生存の意味はあくまで科学的世界観に基づくものである
- ③ この世で実現されない因果応報が来世において実現される
- ④ 生存の意味をその内部に求めず科学的世界観に求めるべきだ
- ⑤ 不誠実で利己的な者が成功する現実世界は矛盾に満ちている

問5

「B異なる思想伝統の中に共通するものとして応報の考え方を取り出すことができるように思う」とあるが、ここでいう「応報の考え方」を、ここまでの記述から筆者はどのようなものと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は

16。

- ① 期待と現実のアンビヴァレントな関係に裏切られ続けた人々が常に意識する願望と考えている。
- ② 科学的世界観によって排除されたが、遊戯的な思考としてはいまだに存在している想念と考えている。
- ③ 輪廻転生の思想と切り離しがたい関係をもって、今も人々の心の中に生き続ける想念と考えている。
- ④ 人間の自然な感情に発しており、報いの実現に対する矛盾した気持ち^{はら}を孕んだ願望と考えている。
- ⑤ 時によって報いを期待したり逆に期待しなかったりする人々の揺れ動くような願望と考えている。

問6

「C 現代社会では、行為に応じた報いという意味での因果応報原理は、社会的規範として生きている」とあるが、これはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は17。

- ① 人間の意志的意識的行為は必ず価値を生むという考えが、自然科学の因果関係では説明できなくなり、内面道徳に照らして吟味されるべき原理となっていること。
- ② 社会的責任に背く人間が得をするのは許せないという考えが、個人的感情の枠を超えて、人間の意志的行為を吟味する社会的な原理となっていること。
- ③ 人間は自らの行為を原因としてそれに応じた結果を受けるという考え方が、単なる漠然とした願望ではなく、現実社会において実現すべき原理となっていること。
- ④ 善悪の行為にはその報いがあるべきだという考え方が、脱価値的な世界観に替わって、意志的行為によって実現される社会的な原理となっていること。
- ⑤ 仏教の善因楽果・悪因苦果という教えが、一宗教という枠を超えて、日本の社会全体における社会正義の根拠となり、人々の実現すべき原理となっていること。

問7

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① 死を避けて通ることができない人間が永生を求めることは、科学的世界観を否定して信仰にすぎりつくほど切実で、今なお深刻なものとして残存している。
- ② 科学が世界を自然的因果系列の枠内で捉えるようになると、人間の自由な意思から発した行為こそが価値を実現すると考えられるようになった。
- ③ 人間は行為に応じた結果を受け止めるべきだという考えは、特定の宗教的偏見から離れることによって、公平で客観的な社会思想として全世界に浸透した。
- ④ 因果応報の考え方が現実逃避の想念であると否定されたことで、社会は脱価値的世界における個々人の思いつく意志の実践の場となった。
- ⑤ 輪廻転生という円環的観念と結びついた仏教的世界観と、直線的な時間理解をするキリスト教的世界観とはまったく相容れないものである。

漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問 A～Hの各傍線部に相当する漢字を含むものはどれか。また、I～Jの空欄に入れるのに最も適当な語句はどれか。それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は19～28。

A 証人がシヨウカンに**19**。

- ① 書画に押されたラツカン。
- ② 事件のコンカンに関わる。
- ③ 父がカンレキを迎える。
- ④ 阿鼻キョウカンの声上がる。
- ⑤ これ以上はカンニンできない。

B 蝸牛カクジヨウの争い。**20**

- ① トウカクを現す。
- ② 隣の人とカンカクをとる。
- ③ ショツカクを多数抱え養う。
- ④ 立派なジヨウカクを構える。
- ⑤ 大きく見えるのは目のサツカクだ。

C カイシンの出来映え。**21**

- ① 内閣をカイゾウする。
- ② 院長がカイシンする。
- ③ 厳しいカイリツを守る。
- ④ カイゴウで社長が発言する。
- ⑤ カイウンのお守りを握りしめる。

D 体のジュウシンを失い転ぶ。**22**

- ① チョウヨウの序を守る。
- ② 皆にチョウホウがられる。
- ③ 大地震のゼンチョウ。
- ④ 葬儀に行けずチョウデンを打つ。
- ⑤ チョウウカを競って海へ出る。

E 隣国とツウシヨウ協定を結ぶ。 23

- ① ショウコウ機で給食を三階へ運ぶ。
- ② 日本ショウコウ会議所。
- ③ ショウコウが連隊を率いる。
- ④ 葬儀に参列してショウコウをする。
- ⑤ 病状はショウコウを保っている。

F アンケートにカイトウする。 24

- ① 病人をカイゴする。
- ② 窓をカイホウする。
- ③ 問題をカイケツする。
- ④ 病気がカイユする。
- ⑤ 隣家からカイラン板が届く。

G 敵をアナドるのはよくない。 25

- ① 素人をブベツする。
- ② 士気をコブする。
- ③ 別のブシヨに異動する。
- ④ ブレイを働く。
- ⑤ ブゲイに秀でる。

H 免許に必要な単位をトる。 26

- ① 太平洋で魚をギョカクする。
- ② 会長室でシツムする。
- ③ 森で植物をサイシユウする。
- ④ 記念サツエイをする。
- ⑤ 栄養物をセツシユする。

I 有象 27 の集まり。

- ① 少益
- ② 小僧
- ③ 無象
- ④ 有形
- ⑤ 大影

J 街角でばったり出会うと、彼は鳩が 28 ような顔をした。

- ① 石矢で射られた
- ② 鷹たかに襲はわれた
- ③ 豆鉄砲を食った
- ④ 粟あわを食らった
- ⑤ 飛び立った

(問題 終わり)

（
余
白
）

（
余
白
）